

書けない手紙

雨音多一



クリスマスのイルミネーションが夜道を照らしている。十二月二十三日。――二十六才の誕生日が、フラれた記念日になるとは思わなかった。道を歩く恋人たちの姿が、やけにまぶしく見える。

「クリスマス・プレゼントは要らないから」

彼女が僕にそう告げたのは昨日のことだった。付き合いはじめて五カ月。久しぶりに結婚を考えた彼女だった。

――クリスマスなんて.....。

本屋の前で信号が変わり、赤になった。そこで立ち止まる。本屋から音楽が流れてくる。やさしい音楽だった。胸に染み入るようだ。僕は思わず店内を覗いた。ショーケースの中のきらびやかな万年筆に目がとまった。

からん。

「いらっしゃいませ」

僕はショーケースの前に立った。白銀の筐体が眩しく瞳に映る。

――ひとめ惚れだった。

「この万年筆をください」

店員は怪訝そうに万年筆をショーケースから取り出した。

「クリスマス・プレゼント用のラッピングはどうしますか？」

「いえ、結構です」

僕は頭をふった。しかし、まあ、自分へのプレゼントでもあるか。

「やっぱり、ラッピングして下さい」

「分かりました」

女性の店員は丁寧に万年筆を箱に収めると、器用にラッピングしてくれた。僕はお金を払うと、店を出た。

水野アキラ、二十六才。クリスマスのプレゼントは、頑張った自分へのご褒美だった。

――何を書こうか？

久しく文章らしい文章を書いていないことに、僕は気づいた。

その時、携帯が鳴った。

「はい、もしもし」

「アキラか。誕生日、おめでとう」

父だった。時々それとなく電話をくれるのだ。今日もそんな感じだった。

「わざわざ、ありがとう」

父と五分位話しをした。とりとめのない話だったが、自然とやさぐれていた心が和んだ。

「それじゃ、また。もう切るね」

「あまり気張らんようにな。それじゃあ」

最後の言葉に目頭が熱くなった。

――そうだ、手紙を書こう。

いつもメールだけなのだ。

両親へ手紙を書こう。

それは、とびきり良いアイデアのように思えた。だが、いざ万年筆を握ってみても、何も思い浮かばない。何から書こう？ 「拜啓」？ 「前略」？ どうもしっくりとこない。それとも年賀状に一筆添えるか.....。いや、もう年賀状は全部パソコンで作って出したのだった。

では、日記はどうか？ これも良い。僕は明日、新年からスタートする日記帳を買うことを心に決めた。

そうして、僕は新年を迎えた。まだ万年筆は使っていない。日記帳は、大晦日の昨日、せわしない中、買い求めてきた。

日記帳にはまず最初に、「年頭の所感」というページがあった。ここに何を書きつけたら良いのか、頭をひねってみる。

「結婚」はどうか？ いや、これは目標として遠すぎる。それでは「彼女」は？ これもまだ生傷である。

そうだ。手紙はどうか？ やはり最初の思いつきが一番良い。これにしよう。これに決めた。

「毎週日曜日の午前中に、誰かへ『手紙』を書く」。それは僕が新年の休みに決めた、今年目標となった。

両親の他に誰へ書こうか。これが難しい。いつも会う人を書くには詰まらな過ぎる。第一、日頃会っているから、改めて何を書いていいのか分からない。

では、同級生はどうか？ これが良い。「今何をしている」とか、「最近どうか」などというのは、当たりさわりが無くて良い。

ここまで決めるのに半日かかった。思えば書初めは明日である。あとは明日にしよう。

「拝啓」から書き始めてみる。いいぞ、万年筆はすこぶる書き味が良い。
「新年となりました、ご無沙汰いたしておりました」この調子でいい。
「去年は幾多の出会いと別れがありました」確かに別れは多かった。
「新年を新たな気持ちで迎えております」これでいい。

この調子で、あっという間に、便箋二枚を書き上げた。やれば出来るものである。新年はなかなかの滑り出しだ。
「かけない手紙」を書き上げて、僕は様々なことを思い出していた。大きな岩は、動き出す迄が大変である。しかし、動き出せばあとは勢いで走り出す。手紙もまた然り。心も似たようなものかもしれない。盾と矛は破られた。万年筆によって。

そうして、二カ月が過ぎた。毎週日曜日の午前中に手紙を書いてみた。メールとは全く違う。同級生の反応も良い。そして……。三カ月前に別れた彼女にも手紙を書いた。出そうと思った。けれども書いた手紙は未だ手元にある。時々思い出しては、別れた彼女への「書けない手紙」をもう一度書いてみるのだ。ポストに出すことは多分無いだろう。それでも、時間がある時に書き改めてしまう。

筆とは不思議なものである。一筆で全てが変わる。一文で全ての意味が変わってしまう。水泡に帰すのも、一攫千金となるのも、筆の運びによる。

だが、心は違う。心が籠った手紙が、全ての想いをのせて届く。手紙を開いて読む喜び。僕はフラれてしまった彼女に、ある意味感謝している。万年筆と出会えたのだから。

その彼女に手紙を出すのは、一体いつのことだろう。

(結)

書けない手紙

<http://p.booklog.jp/book/128939>

2019年 11月15日 初版発行

著者：雨音多一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/taichi-amane/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/128939>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社